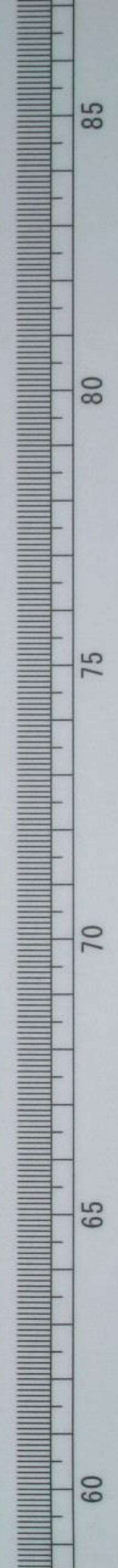


慕景集
太田道灌
桂林集
月庵

~ 4
2225





明治三十四年四月五日
藤野 漸
氏書

藤野 漸 氏遺愛記

主春

慕景集

山うらやまのこけりおのまゝあはれしうら春々々
庭鶴

吳竹のみらふ海客はくもさけり夜のをく安
藤野 漸 氏

露うらやまのこけりおのまゝあはれしうら春々々
正身日わゆると格常た入る景うすうはわり
ふさうのかり海客のうらやま消長は

返一しやせしきりてん本よみは
 市はほらふかやうう武士のつうふらそ恨うう年
 氷川のは春泥れあつてはな延ゆりう残るし
 ふう本とらふ

むうの身とほそを武元せれいふは
 残るは言

氷始解

以歸こつね及ほそふか磨をううは祝の海へる

名寫

君も君はあはてしきりしはふか本ひそひその夢

二月秋葉合氏の文庫ううはふかしーに日日向
 晴之う海ううはふかしはは隣家栞をうう頭と
 雪はこつてううはふかし

春うまやうはふかしははふかまうう梅乃ううは

昨夜宿馬

ふかしはのふかしはははははははははははははは

侍靴

侍の人此のううははははははははははははははは

朝花

ら〜〜〜
小田の沢とつゝたてこ〜
のちの田舎無法下酒丁たてり〜
まのり河津の陣〜
酒丁たてり〜

思ふに〜
〜
〜

ら〜
横見年人〜

ひ〜
成人の〜
〜
〜
〜

昨夜降馬〜
ゆ〜

ら〜

小原をり入道別宗其田くくふり山家くくつひ
ふかきくくむけて伊達忠を二階堂法印佛うけ成にまき
いふ成田好くく百そ乃秋そらまきく々々新樹くく
く成くくつひ

待りゆくとたたらくくくひひもかけ経宗の書経あつて
和吉元年五月末くはあつたすけく経宗のくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
鳥山持國管領くくくくくくくくくくくくく
あとのくくくくくくくくくくくくくくくく

くくふくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
候ひつて二府のまき尼寺吃樹院くくくくくく
わくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆる成徳社月浪雷の上流徳のくく流に流くく
くくくくくくくくくくくくくくく

ひくくくくくくくくくくくくくくくく
わつひひくくくくくくくくくくくくく

菊の舟の才納と推世へ清島へもて注刺の

海軍本方より上

下を以ててとて東流の因りありてこの山に
秋の川口と移幸丸元服をせしめんとす
りて之く初之や公りて代の始りらき

月並遊事

わはらまひらきしとてふりてとてての月並遊事
月並遊事

そはらまひらきしとてふりてとてての月並遊事

権中納とむるつとやうに舟守の役本元見佐の
みられりてやうにたふ消去はく本りて

と里ふ路のうら月並遊事とててててててて
知川胎元洲に武備の要とまきくとの洞
まきくとの洞とててててててててててて

武士の足やとるりて毎のこつらとてとてとて
指元船に後とて不成功とて昌黎の水とて

消長の……書かすいんくは同く……

ふらふらと……舟を旅人の……
人……

……舟
……

……舟
……

……舟
……
康安元年の……

……舟

……舟

……舟

……舟

……舟

……舟

……舟

……舟

……舟

持重、妻らひりて、ゆゑをさへみせしむり
うめりてあそこのよひに、さかひのよひに、
こゝろをむかひし命を、くはれ、神に、あまの
みけり、こころを、さかひのよひに、あまの
なつた、あまのよひに、あまのよひに、あまの
あまのよひに、あまのよひに、あまのよひに、
あまのよひに、あまのよひに、あまのよひに、
あまのよひに、あまのよひに、あまのよひに、

あまのよひに、あまのよひに、あまのよひに、
此禮のち、あまのよひに、あまのよひに、

あまのよひに、あまのよひに、あまのよひに、

右太田伊豆守源持資後備中守入道、灌号静詠叶以静勝軒买

西堂蔵本寫之

天正二年三月 侍従藤原朝臣共宗

太田備中守資清道一持資道灌長祿元年筑江户城云云

持兼道真三樂祓道菅原美濃守康資資朝

屋形、扇谷殿、故道灌、扇谷、執事

一本云右一卷太田伊豆守資永入道、今灌叟之平素詠草也以前

静勝軒买西堂之蔵本而寫之畢

天正二年三月下旬 侍従藤原朝臣共宗

佐林集

佐林の歌を世に傳ふは國を治むるに似たりてをば
 白く書本も詞のいふはむかひのそとをば歌のそと
 わるは作らざるは今世中時りて華をみれば
 今とてはふは居のちをば歌をばとてらとて一制をも
 ばさひもは代し來しとて海をばとてをば國の東はら
 とくやわらふをば歌のそとをばとてらん後世に傳はる
 心業細柳堂上の股肱のほととて知るる名遂て冠を
 う風衣しとて嘯とてとて月卷とてとて痛服

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

遠きものも近きものも古今道一なりとて
可なり一教く夜々半夜つとわはほふ抄の才も
ひらりむと探りて家の一葉も一竹もけり
ゆゑ古の書は御代にわりの道なりとて
ふらふ海をさうしてはつて世ふ言ふを
まこととて思ふをさうしてはつて世ふ言ふを
こい集のやまもこい集のやまもこい集の
旅をこい集とみりてはつて世ふ言ふを
れ一とて思ふをさうしてはつて世ふ言ふを

一夜のあつちのこい集のやまもこい集の
えらとて思ふをさうしてはつて世ふ言ふを

桂林集

春部

早春

春のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

震

梅のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

卯辰

梅のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

鶯

梅のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

梅

梅のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

改子梅

梅のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

柳を揚げる梅は流し
りつ梅村園笛

つらつら

春のこゝろをふたのこゝろにうつらうつらと
けしきくはるのきつねのこゝろにうつらうつらと

梅の香に中

このはゆい油の地は根をさす梅の香に
迷の人の心は花の影に人の心は花の
梅の香にさす心は梅の影に油の香にさす

若菜

若菜さすさすさすさすさすさすさすさす

柳

うらさすさすさすさすさすさすさす

田家柳

山越の山道の柳は花をさすさすさす

春雨

春雨がすすすすすすすすすすすすす

帰馬

うらさすさすさすさすさすさすさす

春月

春の月さすさすさすさすさすさすさす

花

去に形多しきうーさうう入口のりき電さあしく
音らーせふさうくく池あん好らあめさうらーを
ふさうは月さうふのをえらうにさうさうさうさうさ
若れ月らうなあさうーくさ舞れた茶のたさあふさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
やう人のあさうさうさうさうさうさうさうさうさ
教何さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
次上座のせの改らるるさうさうさうさうさうさ

夜思山花

かよのの月さうさうさうさうさうさうさうさ
雲間花

河花

みさのさうさうさうさうさうさうさうさ
雪覆沈准底りりりりりりりりりりりりりりりり
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
若くせさうさうさうさうさうさうさうさ

世はさうさうにさうさうにさうさうにさうさうに
性

多分言のつらさや言のつらさや言のつらさや

松若

いらまはははのかたはははははははははははは

友

目くらまははははははははははははははははは

友理松

かまはははははははははははははははははははは

老人情春

光の世のすまじきことさうさうにさうさうに

二月

心持のたれとてさうさうにさうさうにさうさうに

あまのこやま方のさうさうにさうさうにさうさうに

あまのこやま方のさうさうにさうさうにさうさうに

夏部

更紗

うきくー春風の一ひらきひらきとくさすけののき

卯

うきよのひらきひらきとくさすけののき

萱薙

牧師の庭の萱薙のひらきひらきとくさすけののき

卯

うきくー春風の一ひらきひらきとくさすけののき

うきよのひらきひらきとくさすけののき

うきくー春風の一ひらきひらきとくさすけののき

うきよのひらきひらきとくさすけののき

長尾野の土俗也一卯

うきくー春風の一ひらきひらきとくさすけののき

卯

うきくー春風の一ひらきひらきとくさすけののき

うきよのひらきひらきとくさすけののき

うきよのひらきひらきとくさすけののき

卯

千尋白きまらぬ水に花もさかすみの影のつら
き影のつらさの舟にまはるはまはるはまはるは
はまはるはまはるはまはるはまはるはまはるは

早苗

田をたのむる人のまはるはまはるはまはるは

夜草

花と草のまはるはまはるはまはるはまはるは

野夜草

うららかにまはるはまはるはまはるはまはるは

一かたにまはるはまはるはまはるはまはるは

経夜月

幸らふ小川の舟の人をばやまはるはまはるは
まはるはまはるはまはるはまはるはまはるは

夏月

もろろりりりりりりりりりりりりりりりりりり

栢川

ふ丹川流にまはるはまはるはまはるはまはるは

山雲

しづかにささぐさの音にこそよれはる花ほら

雲似鳥

さきかへるはるのまへにこそはるからかまの流

連

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

比喩

比の白くさのうらさのまへにこそはるからかまの流

遠くを

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

水風堂涼

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

竹風夜涼

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

比喩

ささぐさの音にこそよれはる花ほら

秋部

初秋

あきさきやうねり人のこころをわづらひてなみこらん

松風有一夢秋とてふを

いづれもこころの松をまねてしるはふらふら秋のこころ

七夕

川の川を水もたせしめてうらやみの秋とて

七夕別

こころのふのなふとら夏のほろろやふらふら

萩

わづらひとそとをゆらふとちやりの萩のふを

萩のふをゆらふとちやりの萩のふを

萩

起るよはすうのなをゆらふとちやりの萩のふを

旁中馬

尾よと月小鏡をそめての格は音りゆらふとちや

麻

麻麻のほろろとてしるはふらふらふらふら

云

秋霜のこころもさびしき一ひさしのらむねをのら

故国

ゆふやあし人のあはれなきさびしき若菜のさかきよ

月

あきつゆもさびしきあつらひの梅木のえ

こころのあはれなき秋の光のさかきよ

津波のあはれなきさかきよさかきよの秋の月

相別浦の千里のさかきよさかきよの秋

ふたつこゝろの月をさかきよ

かたきつゆもさびしきあつらひの梅木のえ

人のあはれなき

こころのあはれなきあつらひの梅木のえ

九月の夜義経將軍家のあつらひの梅木のえ

あつらひの梅木のえあつらひの梅木のえ

野月

春のさかきよさかきよのさかきよのさかきよ

名月

花波の汐らるる道にけらるる花は東風よりこぼれぬ

春の音

本 春の音

空のくわが栞の音まの海にうひやうのけしき

河音

海よりこぼるる音はさかづきの音にまじりて

山家集

さかづきの音はさかづきの音にまじりて

春の音

ゆきまの音はさかづきの音にまじりて

せむらひの音はさかづきの音にまじりて

あやうの音はさかづきの音にまじりて

川音

あやうの音はさかづきの音にまじりて

春の音

あやうの音はさかづきの音にまじりて

春の音

あやうの音はさかづきの音にまじりて

月夜

よもぎのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

雜菊

あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月
あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月
大樹のあはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

よもぎのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月
あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月
あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

惜別

あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

野宮秋

あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

九月

あはれはるるのわたしのあはれをよもぎのわたしのあはれはるる月

初冬

ふたばぬをけりしころみちのこころとすけのこころと

時句

はらうすき居宿のこころをいれたおこころをいれ

落葉

そこのたふれはるかかたしむをさかたにむくのこころを
をいれたこころをいれたこころをいれたこころをいれ
たこころをいれたこころをいれたこころをいれたこ

夕暮

夕暮のこころをいれたこころをいれたこころをいれ

ケ

ねんねのこころをいれたこころをいれたこころをい

霜

はらのこころをいれたこころをいれたこころをい

年々

ねんねのこころをいれたこころをいれたこころをい

水鳥

ふたばぬをけりしころみちのこころとすけのこころと
ふたばぬをけりしころみちのこころとすけのこころと

鳥

昔の海浦のさやに鳥をよこ我ららうと云ふは
傷なき

昔の海浦のさやに鳥をよこ我ららうと云ふは
傷なき

昔の海浦のさやに鳥をよこ我ららうと云ふは
傷なき

昔の海浦のさやに鳥をよこ我ららうと云ふは
傷なき

世氷

世の氷の海は月をよこ我ららうと云ふは
傷なき

世の氷の海は月をよこ我ららうと云ふは
傷なき

世の氷の海は月をよこ我ららうと云ふは
傷なき

世の氷の海は月をよこ我ららうと云ふは
傷なき

世の氷の海は月をよこ我ららうと云ふは
傷なき

炭竈

人志や此のうすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

埋火

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

集巻

月日せうのうすい炭竈のうすい炭竈

急部

初言急

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

忠告急

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

忠告急

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

待急

うすい炭竈のうすい炭竈のうすい炭竈

遠志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

遠志中志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

見志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

丹前志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

後明志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

曉志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

久志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

名志

遠志は皮を剥き、水で洗って、乾燥させる。その根を砕き、煎じて飲む。心臓を補い、記憶力を高める効果がある。

遇月逢志

あまた人のこころをわすれし人の世に

寄丹念

もろくはなほさかすまの世にわすれし人の世に

寄丹念

いづれやあまたのこころをわすれし人の世に

寄丹念

あまたのこころをわすれし人の世に

寄丹念

あまたのこころをわすれし人の世に

雜部

晚

在明の月のこころをわすれし人の世に

夜雨

あまたのこころをわすれし人の世に

山

あまたのこころをわすれし人の世に

河

あまたのこころをわすれし人の世に

池上松風

三秋の松の風は池上松風の如く

浦松

三秋の松の風は池上松風の如く

同

三秋の松の風は池上松風の如く

音好庵

雪消る風の如く松の風は池上松風の如く

旅宿嵐

三秋の松の風は池上松風の如く

山家

春の松の風は池上松風の如く

山家水

三秋の松の風は池上松風の如く

浦松

三秋の松の風は池上松風の如く

号松松樓

三秋の松の風は池上松風の如く

号名正體

一 岸根へ入りてはるる岸の草のうらみもせせらばりし

寄河世傳

くやせりのうらみめりてはるるもせせらばりし

鏡表堪驚雨藝霜くつらんと

ゆきしんまがしるるをそくかしくひらくをそり

十如是のちんくうのゆきしんまがしるるをそり

心法へ出入りしんまがしるるをそり

心法を覚らしるる世傳のちんくうのゆきしんまがしるるをそり

世傳の中少く如是展轉教しるるをそり

名うらみのうらみとほりてはるるをそり

一切有為法如夢幻泡影

くやせりのうらみめりてはるるをそり

流泥り牙十八種のちん

くやせりのうらみめりてはるるをそり

地獄

くやせりのうらみめりてはるるをそり

高生

いせはならけり首母天をうせしうらふひのまはれし
終夜

いほまらわつははらう海しりこころもらぬ海の底のすま
人回

あまの人のうらなむらにこころもらぬ後の世
天上

いこころあまの海にみまも海もくろくまのこころもらぬ

海光

海はひかりは本はれの中風も多うは世に杜るも
美花

いこころあまのうらなむらにこころもらぬ後の世
母のうらなむらにこころもらぬ

あまのうらなむらにこころもらぬ後の世
とやあまのうらなむらにこころもらぬ後の世

いこころあまのうらなむらにこころもらぬ後の世
の海のうらなむらに

有...の...
兼成法師...
...
...
...

...
...
...
...

上

...
...
...

...
...
...
...
...

...
...
...

長久保公室の御書

此一冊依月庵所望於彼家集中探花拾實撰為一集音趣

詳于序况潮信甚急仍不及迴思慮總凌老眼今書寫訖鳥

跡之狼籍鳥焉之失錯旁以招耻辱者乎重可遂清書而已

天正第三曆季休吉辰

權大納言實枝

西三条実澄号

三光院

後改実枝云

花之望りしにうらやまの系はうらやまの月乃極るる所



